

日本ケーブルラボ・2015年の展望

藤本勇治 理事長、松本修一 専務理事に聞く

ラボと連盟は両輪、一丸となって！



松本修一 専務理事

ケーブルテレビの2015年の4K
実用放送に向け、日本ケーブルラボ
は、11月に第3世代STBの仕様を
発表した。2015年を迎え、日本ケー
ブルラボの藤本勇治理事長と松本
修一専務理事に、その展望と取り
組みについて話を伺った。2人は、
技術が進化し調査・研究の幅が広
がる中で、正確・最新の情報発信、
ケーブルテレビ業界と一丸となった
取り組みを進めると意欲を語った。
(聞き手：本誌編集長 遠藤雅敏、
編集委員 宮崎経生)



藤本勇治 理事長

**連盟との連携で加速
遅滞なく4K展開を**

Q 新理事長として、2015
年はどんな年に？

藤本 理事長に就任する前、
旧JCNにいましたが、日本
ケーブルラボを外側から見
て、理解が十分でなかった
というのが率直な感想です。
これは私だけでなく、ケー
ブル事業者のみなさんの意識の
中にラボの動きが十分に認識
されていないのではないかと
感じています。皆さんが導入
し接続しているSTBや録画
機などの機器はラボがその仕
様やガイドラインを策定し接
続認定をしているから使える
わけで、その部分が十分に
伝わっていないと思います。
ケーブルテレビ業界は、他
の業界と違って競合がなく、
一丸となりやすい特徴があり
ます。日本ケーブルテレビ連
盟と日本ケーブルラボの両輪
の連携によって、業界の動き
はもっと一体化し、もっと速く
なると思います。

私役割は、ラボと個々の
ケーブルテレビ事業者の皆さ
んをつないでいく。皆さんの
声を聞くとともに、ラボがや
っていることをきちんと伝え、
特に経営層の方々に理解して
いただき、同じベクトルで共
通の動きをしていくためのお
役に立てればと思います。そ
れが私のミッションと思っ
ています。

ラボが決めた技術仕様やガ
イドラインに基づいて実際に
メーカーが生産してくれて、そ
れを多くのケーブルテレビ事
業者が導入して新しいサービ
スを始めるようになる、それ
がラボの仕事の完成形です。
当面の2015年の課題は、
第3世代STBの仕様に基づ
いて、各事業者のニーズとメー
カーの意向をつなぐことによ
って、事業者の皆さんが遅滞
なく4K展開ができるように
動くことが、一番大事なことだ
と思っています。

**第3世代STB製品化
夏ごろに早まるか**

Q その第3世代STBで、工
夫し、苦労したことは？

松本 第3世代STBの仕様
のどこまでを決めるのか、そ
の範囲について悩みました。
STBのすみずみまでの機能
や仕様を決めてメーカーや事
業者に縛りを作ることは良く

ないと考え、今回は機能要件の核として、4K、ハイブリッドキャスト、リモート視聴の3点に絞りました。その他は、デザインマターとし、製作メーカーにお任せすることになりました。それが第2世代STBと大きく違う点です。今、メーカーサイドはラボ仕様を基に工夫して製作しているようです。

また、IPTVフォロラムの仕様はどこまで準拠するかどうかについても悩みました。4Kの場合には、IP系が重要な位置づけで、VODとリアの2つがありますが、その仕様をどこまでIPTVフォロラム仕様に合わせているかが課題でした。ケーブルネットワークは通信会社のネットワークと構成が違います。IPTVフォロラムの機能要件をそのまま生かすのではなく、ケーブルシステムに合わせて整理する必要があります。

そのため、ケーブル事業者の皆さんに仕様検討に積極的に参加していただきました。STBの発売は、メーカーによりませんが、当初は2015年末の予定だったが夏頃に早まりそうで期待をいま

す。ラボとしては4Kハードの認定作業が必要となるのでその体制整備を進めています。

期待感強く ラボの使命大きい

Q ラボへの反響と期待は？

藤本 いろいろお話を聞かせて

いただきましたが、ラボに対する期待感はとても強いものがあります。今後の競争を真剣に考えるケーブル事業者の方々は、これからは大手通信事業者とネットワークサービスでの競争になることを良く理解されています。それは各社が単独にハードを入れてできることではありません。日本ケーブルテレビ連盟が進める共通ケーブル・プラットフォームの上でネットワークDVR、ケーブルDLNAなどのサービスが実現して、初めてコストも下がり競争力を持てます。

ラボとして、新しい時代に向けてやっていることや、マーケットの状況などの最新情報を全国のケーブル事業者の皆さんに伝えていこうと考えています。

また、技術進化が速く、経験していない未曾有の危機ス

テージに入っているとイメージしますが、その中で、ラボがやらなければならないことは多く、ラボの使命は大きいと思います。

最新技術の 調査・分析が重要

Q 技術の進展は早いですが

松本 最新技術の調査と分析

がますます重要になっていきます。連盟のケーブル・プラットフォーム構築に向けて、関連する技術について正確な最新情報発信は大きな意味があります。かつては、ケーブルにかかわるモデムやQAMなどの伝送技術がわかっていれば十分だったものが、今は、DLNA、MVNO、ID連携、公的個人認証など広範囲になっています。

特に、MVNOについては、どこまでケーブルがビジネスとして展開するのか、そのためにどういう設備や運用をケーブル事業者が行うのか、技術的視点からアドバイスすることにより、最適な方針決定を下せるよう、ラボとして適切な情報発信をしていきたいと思っています。

6大プロジェクトを 「物」にする

Q 2015年のラボのテーマは？

松本 2014年に、初めての試みで6大プロジェクトを立てましたが、それを続け、具体化して「物」にする。4Kをはじめ、ケーブル・プラットフォームを実際の形にしていきます。

その中で重要なものが2つあって、ネットワークDVRとダウンロードダブルキャストです。今やらないと後手に回ってしまいます。特に、キャストについては、カードのあり方が変わってしまうので、どんなカードを使い、誰がどうやって管理するのか、どういう方式を使うのが大事です。また4Kについては、暗号化についてハリウッドは高度な管理を求めています。

ネットワークDVRは、マルチスクリーン時代には必須のもので、キーになる技術となりますので力を入れていきたいと思っています。

同時に最新技術の調査分析も大事にしたいと考えています。

安価な4K編集システム 足元から先までを見て

Q 2015年の抱負を

藤本 我々がやるべきことこの範囲は、足元のことから先を見ることまで。今後の競争を考えると、足元でいえばもつと足元、具体的には4K編集システムは、値段が高くてケーブル事業者は困っています。安価なシステムを構築する態勢をつくりたいと考えています。

その他、地域BWA、あるいはMVNOの技術的サポートなどの懸念する点を明確にして提言していきます。また先のこととして、ダウンロードダブルキャストやビッグデータ、そして「未来端末」というのも検討しています。ここではSTBの主な機能を極力ネットワークに移行し、数千円のSTBを作っていないと将来生き残れません。きわめて足元から先のことまで検討範囲を広げていきます。こうした積み重ねで、我々、日本ケーブルラボは、ケーブルテレビ業界の競争力開発とコスト削減に努めていきます。

———ありがとうございました。